福祉と「宗教の公共的役割」（仮）

目次

1.「福祉の哲学」と ICF 四世界論

(1)人は世界をどう受け止めているのか

(2)脳と心と認識

2. 今なぜ宗教の公共的役割なのか

(1)ポスト世俗化社会とは

(2)日本の戦後社会の特徴

(3)「新しい公共」と市民自治

3. 相互扶助の宗教伝統をどう現代に生かせるのか

(1)儒教―三浦梅園と「地域福祉」の始まり

(2)統治か、自治か

(3)仏教―渡辺海旭と「宇宙の原理、社会の原理」としての法

(4)キリスト教―「教会の自治」とボランタリズムの推進

4. 賀川豊彦と公共福祉

（1）相互扶助の再興

（2）協同組合運動の二つの系譜

5.創発民主主義の展開

（1）福祉と世界倫理

（2）福祉と平和－コミュニテイのグリーフ・ケア

1.「福祉の哲学」と ICF 四世界論

(1)人は世界をどう受け止めているのか

筆者は福祉の哲学の基本に公共哲学をおいている。その認識論の概要から入りたい。主体が世界に接したときに、四層の意味として経験する四世界論というものを提起している。主体が世界を意味として四層で解釈している筆者の四世界論と、医療・福祉のリハビリの現場で使われる ICF（国際生活機能分類）とは対応づけることができる（図 1 参照）[1]。

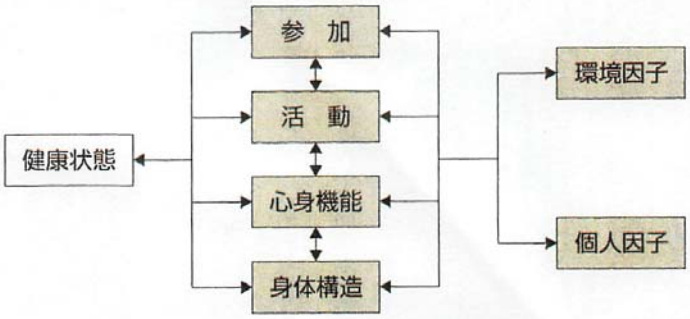
ICF は 2001 年に WHO の総会で採択された「生活機能・障害・健康を包括的に意味づけるための詳細な分類」で、スピリチュアルな意味も含まれている。「活動と参加」とまとめられた一つに「コミュニテイライフ、社会生活、市民生活」という項目の中の「宗教とスピリチュアリテイ」（d 九三〇）が位置づけられているからだ。説明文には「自己実現のため、宗教的またはスピリチュアルな活動、組織化、儀礼に関与すること。意味や宗教的あるいはスピリチュアルな価値を発見すること。神的な力との結びつきを確立すること」とあり、さらに「例えば、教会、寺院、モスク、シナゴーグへの出席。祈り、宗教的目的のための詠唱、精神的瞑想」と書かれている[2]。

---

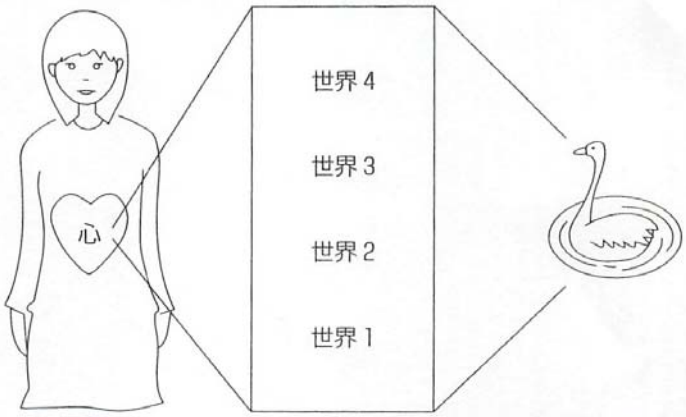
[1] 拙著『公共福祉という試み』（中央法規出版、2010 年）128 頁。

[2] 障碍者福祉研究会編『ICF 国際生活機能分類―国際障害分類改訂版』中央法規出版、2002 年。

ICF（国際生活機能分類）モデル

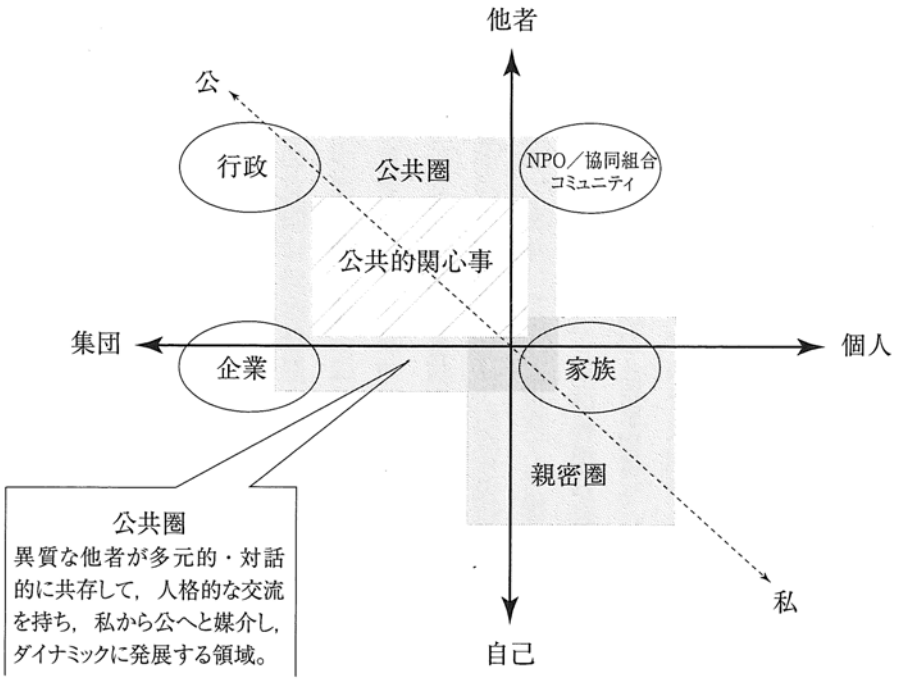


四世界論としての創発的解釈学



主観が実在（リアリティ）を認識する仕組みを筆者は創発的解釈学と呼んでいる。世界 1（自然的・身体的意味の世界）、世界 2（心理的意味の世界）、世界 3（社会的・倫理的意味の世界）、世界 4（スピリチュアルな意味の世界）。

出典：稲垣久和『宗教と公共哲学――生活世界のスピリチュアリティ』東京大学出版会、2004年、62頁



「自己－他者」と「親密圏－公共圏」の図